

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【17】ほうろく街道…都通から自由が丘へ

1 ほうろくの道

「焙烙」と呼ばれる平らな鍋があります。今ではほとんど見られなくなりましたが、豆や茶などを炒るのに用いられるもので、大きさは直径30㍍、深さは4㍍くらいの土鍋です。調理の道具としてだけでなく、時にはお盆の送り火・迎え火の皿や割れ方で占う神事などにも使われたといえます。

猿投山麓や三河山間部で焼かれたこの鍋を名古屋で売り歩いていた人たちがいました。千種区の覚王山の北側にある「ほうろく街道」と呼ばれた道は、この焙烙を運んだ人が通った道だといわれています。道の勾配が焙烙を伏せた時のように坂の上が平らだったからではという説もありますが、やはり東に向かう道は焙烙の里からの道と思いたいところです。

2 焙烙の道から葬列の道へ …ほうろく街道

(1) 名古屋の火葬場

自由が丘の少し西、日泰寺の東北に、この街

道に沿って北山墓地があります。ここには昔、三明(さんみょう)という名古屋の人の火葬場がありました。(図1)

名古屋の火葬場は江戸時代には吹上だったといえます。今の吹上公園の辺りです。明治30年代になって、そこに名古屋監獄が移ることになったからでしょう。明治30年、名古屋の東の丘陵に新しい火葬場が作られました。三明火葬場です。この火葬場は大正4年に八事に市営の火葬場ができて、市中から近いために上野の火葬場と呼ばれて利用されました。市中の人は葬列を作ってこの三明火葬場まで送ったのです。焙烙の道はいつしか葬列の道へと変わっていき

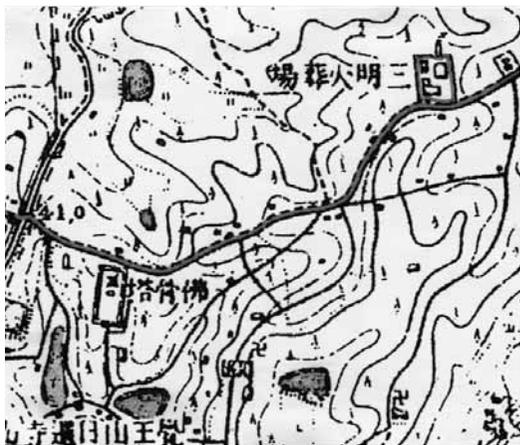


図1 自由が丘の西の三明火葬場(大正9年)

ました。そして戦後この奥に大きな団地が開発されることになるまで、この火葬場は続いたといえます。

(2) ほうろく街道

ほうろく街道は起点も終点もはっきりしていません。しかしルートをとると始点は東区の東海高校の正門(昔は建中寺)付近になります。東に向かい豊前、松軒の間を通過して北千種公園の北から名電高校の前に出ます。ここで少し斜めに進み、振甫プールの北を通過して東に自由が丘に出ます。その後は猪子石にてさらに東に向かったと考えられます。(図2)



図2 市内のほうろく街道(明治21年)

3 都通から自由が丘へ

ほうろく街道の一部を歩いてみましょう。今池の北の都通1丁目の交差点を東に進みます。この辺りは松軒という地名ですがこれは江戸時代に藩の家老になった成瀬豊前守、隠居して松軒と名乗った人の屋敷があった事によります。都通の西にある豊前もその因縁です。道は緩やかにカーブしています。戦前この先に陸軍の兵器支廠や機器製作所があり、このルートには中央本線からの軍用の引込み線が通っていました。この道路の両側を占める公園、宿舎、病院、学校などはそれらの軍事施設の跡地に造られたものです。



S字に曲った街道



名電高校前の道標

名電高校の交差点の少し手前、道路の反対側の歩道に小さな道標があります。ここには昔は小さな水路があり地蔵橋がかかっていました。道標には、右：ちんだい・出来町、左：建中寺、とあります。右は山口街道に通じていました。



道はゆるやかにのぼっていく



みどりの中に遠く振甫家の墓列

ここから街道は少し住宅地の中に消えますが、東南に50^{メートル}位でまた東に進む道につながります。東に進むと辺りは振甫町です。江戸時代の初め中国、明の王族で内乱を避けて亡命した医師、張振甫が住んでいたところです。振甫は初代藩主義直に口説かれてこの地に定住しました。今もご子孫の方が住んでおられます。

道は緩やかに上り始めます。その道が急になった所の左側、大きなお屋敷の途中に史跡の標示板があります。網の間からのぞくと緑のトンネルの向こうに地蔵の石仏が5、6体並んでいるのが見えます。振甫家の代々のお墓のようです。

坂は急になり、上った三差路は四観音道との交点になっています。左手前の角には、

- 「東 やごと ひらばり」
- 「南 あつた かさでら」
- 「西 あらこ」
- 「北 せと りゅうせんじ」



四観音道との交点の石標

と彫られた明治12年の石標があります。東が八事、平針とあるのは南東に下って伊勝から八事に出る道を指しているのでしょうか。

*

広い道路を水道橋の歩道橋を渡ります。街道は日泰寺の北側に沿って進みます。右手、塀の向こうに大きな塔が見えますが、これは日清戦争の戦死者記念碑で砲弾をイメージしたものです。大正9年まで広小路の東の突き当たり、武平町との交点の中央に立てられていたものです。その向こうには仏舎利の奉安塔があるはずですが、成長した木々に隠れてしまっています。

少し進むと日泰寺の広大な墓場が現れます。左側にも時々日泰寺の敷地が現れ、寺の八十八観音巡りのお堂が所々に出てきます。寂しくて、暗くなると通りにくい道です。

少し行くと右手から2車線の道路が合流し静寂さは消えます。そしてその道をたどると左手に寺があり、その向こうに北山墓地が現れます。

北山墓地は戦前に三明火葬場に併設して作ら



木の間から日清戦争の記念碑が見える

れました。南が丘という地名に北山という墓地があるのには理由があります。北山墓地は元々熱田の北山、今は神宮公園になっているところにありました。北山三昧と呼ばれたそれは熱田宿の旅人や遊女の墓地だったのです。昭和15、6年、そこに公園が整備されることになり、ここ覚王山の裏山に移されました。中央には膨大な無縁仏の山が築かれました。そして60年余。平成12年になって、この墓地は経営者が亡くなったため再度移されることになったのです。今度は三重県の伊賀上野です。中心が抜けてさみしくなった北山墓地は、今では西に都心部を見下ろす普通の墓地になってしまいました。

道路の南側は北山墓地の少し東まで日泰寺の墓地が続いています。しかしそこから50^分も歩けば今まで続いた墓地群からガラッと変わった町並みになり、少し行くと自由が丘に飛び出します。戦後出来た住宅団地は早くも2代目になりました。街道はその中の広い道になって、東に向かっていきます。

4 法六句街道？

ほうろく街道は明治21年の陸軍の地図にも道



日泰寺裏の街道



いくつもの物語も消えた北山墓地

路の点線が入っています。(図2) この道は名電高校から東はちょうど愛智郡と春日井郡の境目になるのです。郡の境目の道に、たまたま焙烙を持った人が目立ったからほうろく街道と呼ばれたのでしょうか。

火葬場に向かう道のことを、法六句街道ということがあるといます。法六句とは南無阿弥陀仏の6文字です。この言葉は「ほうろく」とも聞こえるのです。明治30年に三明火葬場ができてからは、この道は別の意味でほうろく街道だったことになります。

そして明治37年、近くに日泰寺(その頃は日暹寺)が出来ました。いやむしろほうろく(法六句)街道があったことによって、その仏縁が評価されこの地に選定されたともいえます。この山道にはわかにかに仏教と深いかかわりのある道になりました。

それから数十年間、交通手段がない時代は市中から三明火葬場にむかって法六句を唱えつつ歩く人達の道になりました。この道はまさに、「ほうろく」街道になったのです。

今はそんな昔がうそのように、焙烙の焼き物のロマンだけが残ったのかもしれない。

緑たつ イノチの道や 南無阿弥陀仏

〈主な参考文献〉

- ①小林元「千種村物語」(1984, 自費)
- ②大野一英「名古屋の駅の物語<上>」(1980, 中日新聞)
- ③舟橋武志編「名古屋いまむかし」(1978, マイタウン)